



尾 蠅 家
全

特 別
~ 5
6144



へ5
6144



世に亦他郷緒とつ
むわりあはる六

帝魚庵藏書



句う〜十二句よ〜めて二折と
かぢり又〜ら教句みて三十人
の名紙かく〜題よ〜て〜も
わり〜い書あ〜る〜の
紙の〜け〜ら〜ら〜ら
け〜〜〜ら〜ら〜ら

〇事

愚作のたよりもすかくはなむ
 かくはなむ海へつるの驥は尾よ
 とあつきて花じせむの類は乃
 ろいふなれは是で尾蠅集と名
 付く物あり

丸 栲牛丸

かのくとの石はう濃新書に

鴻うまはりあて

思ふ

清かれゆくあは
 きよあをりくめて

類船う月もあゝの

鴻かき



右 紀貫之

梅ちるまねの風いさかして

空にちるまねの雪

かりきり

寒くもぬれも

むよのいさかして

梅ちるまねのた

あや雪かたし



つらねも春れ九河門が恒

我宿の花見えそよにまゝ

ちりまん後そ悲し

かゝるま

教がん後さよそと

おひいて

んて後の

恋慕れ梓やむ乃

歌



右 伊勢 三浦いふる ぬも

難波かこみ ぬも

ぬも ぬも

すくしてよとわ

け 苦れと葉をかひ

みく ぬも

るもぬも



左 中細言家持

春の野よわさる ぬも

をのりわりう ぬも

恋慕の道は ぬも

こそと ぬも

書ゆへよ ぬも

焼野の ぬも



右 山邊赤人

さう此浦に塩みちまはれおのこゝろ

わへばうして田鶴啼き

みちろく塩舟

心ひきこて

塩うねや身に行じ

きり乃少くひを



左 在息業平

よの中に絶て様のかくりせ

ほふれあふこのとけ

わ

おのひやてきて

わいよあふや

ちをさへ根もいよ

様か



右 僧正遍昭

た〜ち〜の〜か〜き〜も〜も
い〜む〜れ〜我〜思〜賢〜ハ
か〜て〜す〜や〜あり〜き〜ん

〜ち〜の〜思〜く〜
あ〜の〜は〜よ〜く〜

風のもハガつ〜く〜く〜

柳て



左 素性法師

尺〜も〜せ〜の〜柳〜橋〜で〜こ〜ま〜す〜せ〜て
初〜て〜長〜れ〜綿〜た〜り〜々〜

い〜奇〜れ〜上〜下〜河
き〜て〜ぬ〜き〜う〜て

錦〜ふ〜柳〜さ〜ら〜や

お〜め〜ん〜織



右 紀友則

秋凡よ初乃るのそやゆた
惟玉章紙のけりまらん

け玉章紙

と葉をやはして

乃れ文字の

誰玉章紙の書



九 猿丸太史

奥山よお葉をまじけ時麻の
初きく時を秋はかきま

是どいと葉の

作とあまきて

踏ふ家らやお葉の

詩乃韻字



右 小野小町

色をくして梅も物ハ世中濃

人の心乃むよそありた

人れあはれのみまに

よきんて

うつりかゝる人の

心や根なき



左 中納言兼捕

人の親乃心ハ周よわらぬを

子誠思ふ道よはらふいわざ

子ハ親なく親と

たらしめけ心根ハ

おろひらゝあはよ

親ハ子に目くれ心乃

月よりま



右 中納言相忠

逢ふれ絶つてあはれいぢし
人でもあはれも恨さし

人備なまぬます

まきあはれかこひあはれ

よ

桃の香やあはれを葛れ葉の

いみじ



左 中納言教忠

あはれそれ後の心よあは
むうい物と思ふあはれ

い

あはれあはれい

あはれあはれい

月花やあはれい

あはれあはれい



右

藤原高光

かゝるり物々々々々々

世中に

いやはやくと

丁あつ月水

かゝるやまれば

月此ふいふの端ハ

かゝるやまれば

月七世ハ物々々々々山隈



左

源公忠朝臣

乃やうて山隈書一は

々一知れ

郭云

きく後知さま

人まの耳で

丁あつて

ほろもあつて

山路やけり



右

壬生忠岑

至明のつきながく

別より

あつきはより

うき物

け下の白れ袖を

とりて

うき物やまに

あつきはまに



丸

舟宮女御

琴のひよ

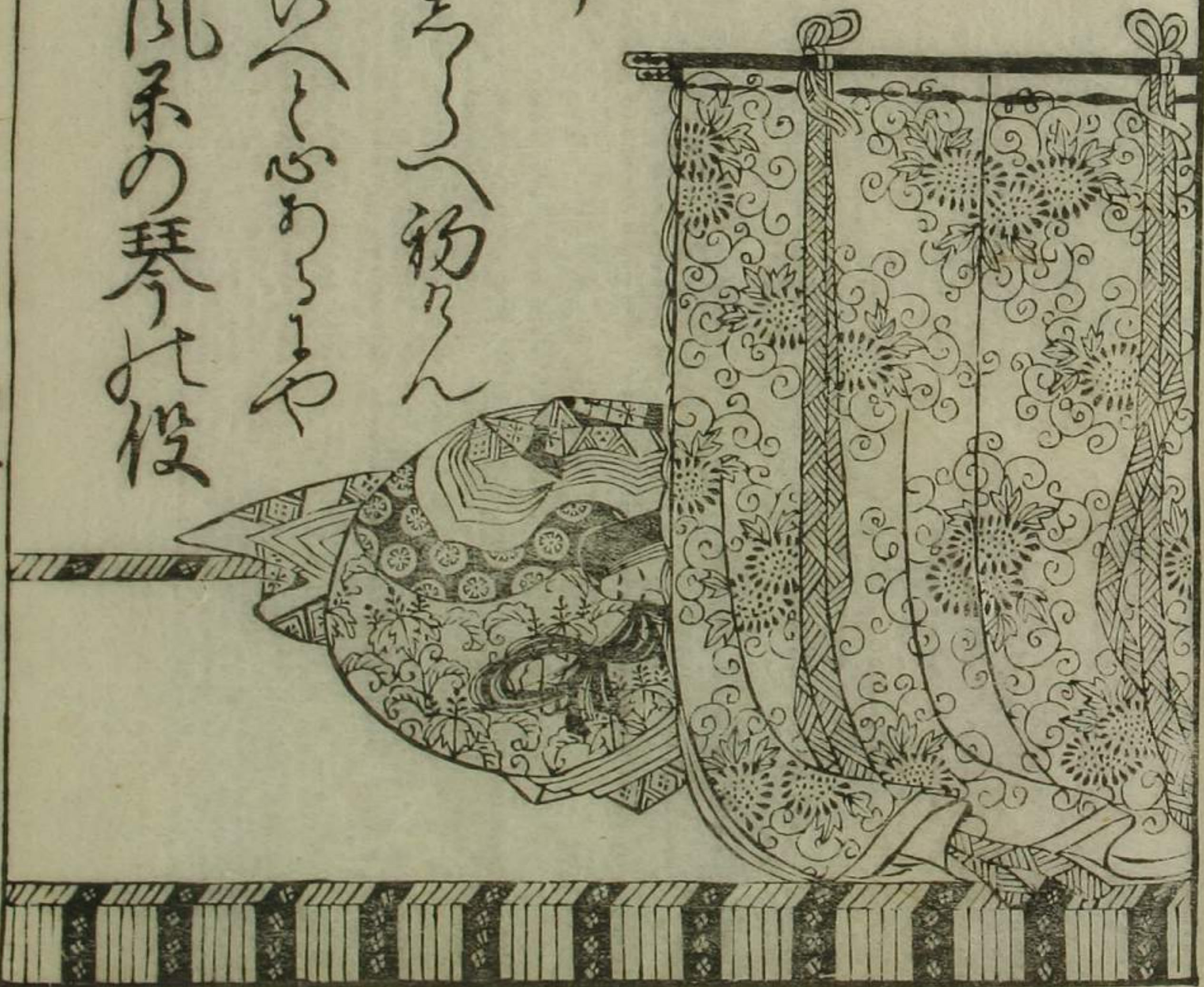
松乃

松風か

いつは緒より

松の非情

まに松や林風糸の琴れ役



右 大中臣頼基朝臣

一海よ子世とあらはる杖を
けりたつきし君うたの

あはれんに

すくひて

ちよをこめてはく
多行やちり杖



左 藤原敏行朝臣

秋きぬと月よのさや
るる祿を風のきにし
驚くれぬる

何のきふとも驚れて

秋きぬと月よのさや

とれ一葉小



右 源重之

風をいひて岩うの波のさなほの
さけて物を思ふは外

岩打波よ心とてさへて

う珠をいひてみ岩うつ

波うさうり藤



左 源宗于躬臣

常盤なる松のみとりも春

と一ほの色 くれい

まごりりり

け弁れわうに姿よ
いつて知ほくまひんあひ
くまひる色と道よ

千世松も若成りといふ

縁外



右 源信の御返

あさあけ月とむを
かきく心もさるん
人よんをさるや

あやの賤ふつ大宴の
月を餅よたふへり聖れ
花よりみさる園子と
思つたさるへり
秋のなきいあさあけの月見
らを見ふ



左 蘇原清正

あさあけ月とむを
かきく心もさるん
人よんをさるや

毛で名所の道ろく

秋の末や少る井の浦乃

露れらる



右 漁順

水の面は照月よ
あふひそ秋の寂中がかりき

月こころ

ゆいそめりて

かきつらやうん

三五廿月の秋



左 藤原真風

契りきんこは
七夕れはよ一ひ遠か

あふら

ちきりらんつさ
いっ斗ふと思ひやれ

夢作よ一板れ星の
うき契



右 清原元輔

吾が此川を流るるは

いそぐ物思ふ神の流

け河のなるは

くして

波のよ名もあはれ

川うつ木



左 坂上是則

みよ野のふらふら

右 錦さびく

なみよなる

や

是さきしり

きりきりいれ

ふいふいしり

きりきり



右 菅原元真

夏草はふりりにきりり

道り人もびよふ斗まの

みちり人の

ねよつきて

たの草やはあく

びよふ和奇れ道



左 小大君

岩橋のよるれ契も

ゆる傳まき

かほりたの神

あらし傳まき

あらし傳まき

葛城の神まきわ

螢れ火



右

藤原仲文

有明の月れいりて清かき

我せれいりて少けよき

人の上れいりて

思ひあはれて

家せ少けてあは

旧友宿の月



左

大中臣能宣朝臣

千年よりてかきわく松も

りふよむとハ君よひいきて

よきはせやるん

此命を忍りて

たのこて

君の代の子はれ松や万たま



右

壬生忠見

忠もつふ我名いすこゝに立にかり

人志れすもし思ひそめしり

人志すす我とす

侍かたれ思ひあま

まにあふねとい花の

名のいしもあかぬい
忠すつふ家名やうん義人

草中



左

平兼盛

書てゆく林のかしこにぞ物い

我りくゆひの霜ふそ

あかき

此りくゆひのさつと

むといて

かりゆひの雲と

ついでせうり

十九



十九

右 中務

槐風のあつよつきても

とらぬ水

萩の葉がさつら

るいてはし

風鈴も何よきりて

まゝとつて返りて

くて

萩の紫々軒の風鈴乃

風ゆきま



兼治幸也

乙月中旬旬

曾牧子

しる

本館よりしりて教司が志あり
和くあり先心禱めし路
是れ思ひ又くは死の音を
月が光かき恋おろそ春乃
多の木の雲入のまよたふ
死をすぬぬ人の極くあせり
のしりつ何よらありまなく

古うが口よりせして死を免
月と目とあつて川に流す
そし小室をたてしうに因
又そそきの死おまにんせ
てあうがあはれんをせ
うは物とさしうに絶物の
小神よ本流と継うやうに

あまげうらたぬあまのり
あまのり

園

追和

しとれ繁き心乃とふかの取木介

流味

しとれ友作と庭乃蝶鳥 三近

少人の履む襦居と去や 小介

あまのり日記 小いとむ揚弓 三信

山陰や月待かとは幕の内 栄富

もみらちを焼て酒宴 伴と 正隣

花よ子世に影をのふと業令頼篇
鶴の籠もいふまゝ傷易延
深きぬ乃懸く我かた紋あめ
それといふぬ大若乃旗通定
近つての歌う味方うおかつうか
責あひの基れ助えうしとせ
而も申は志く一たてし心せよ
又いし人ふも公くもあま
後輝

書かざる誓紙の對にいふあらん
いふて神意乃いふいふと能形
く独跡く能あれ月もいし
いふくあらんいふけぬあれ身
落くゆく方もいふまけ軍
創てハ耳もいふいふちううあふ
物人や深山れ雪よらめぬらん
いふあていふいふいふいふいふ
一景

か入もまればなるぬら内此内
夏の時こころ傳教奇乃道
あつじへて業もうす此等の
願をきむくハ何月の款
七夕に祝義れ酒も終解て
まいりあつるもは秋の友
めんくよ山宿す人世を分る
自領他領の志もさう自
意信

割れハ其前此によき
善しの寺へゆりぬ女房
あつるの說法の座も満
大盤のるをるとしてなけ
ふせよとふせよとて花
のしげよは品のあるハ
吉賞 則方 及胤 新利 光雅 同和

俳諧俳諧吾愛其為重寶無小多三美線之
乱耳無圍碁雙六之閑爭其詞容易其興無
量花前之酒盛月下之夜咄所吟些少而所
樂莫大也彼朱門碧殿貯妓女藏男色數寄
之道相似矣所事則賤矣古人之所謂大車
金玉之飾有心人是為愚也倉內財有朽身
中財無朽金積千兩金不如一日之學俳諧
之道亦如此乎吟之筆之臨其席則富貴閣
思君貧乏礎忘嗚呼樂既足矣吾復何求服
部氏定清者此道達人也曾本三十六人集

之本歌或取其心或摘其言葉妙著癸句而
集之成一冊友人流味詠嘆之特以一句感
賞之遂使同志者連句附其後嗚呼定清之
於俳諧可謂盡善盡美矣作意之梯階在此
集哥哉此集之行世豈非重寶之又重寶乎

寬文三卯曆初夏望日

鵬鶴子書

洛下書堂谷口三餘行

